

- ◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。
- ◎良質堆肥の生産・利用で、自給飼料の安定確保に努めよう。

---

## 乳用牛

---

### ◇ 子牛及び育成牛の飼育管理

#### 1 出生時

- (1) 子牛は、生まれたらすぐに清潔で乾いた稲わらなどで体を拭き、へその緒を希ヨードチンキ等で消毒する。  
分娩直後、母牛が子牛をなめる行動は、子牛の濡れた体が早く乾くだけでなく、呼吸や血液循環を促す効果がある。
- (2) 初乳は、生後4時間以内に2リットル以上、12時間以内にさらに2リットルを飲ませる。母牛が血乳や乳房炎等の場合は、凍結初乳や初乳製剤を使用する。子牛が初乳を飲めない場合は、ストマックチューブを用いて強制的に哺乳する必要があるが、その際は、子牛が動いて食道や喉を傷つけたり、肺に入らないようしっかり保定する。
- (3) 初乳給与後は、乾燥した敷料を敷き詰めた子牛ペン又はカーフハッチに個別に收容し、冷気が直接体に当たらないようにする。出生直後は、気温が15℃以下になると寒冷ストレスを受けることから、必要に応じて暖房器具や保温ジャケットを利用する。
- (4) 生後3日程度経過し、順調に哺乳できるようになれば、スターター（人工乳）を給与し、ルーメン絨毛の発達を促す。このとき、スターターを飼料と認識させるために、3日間程度は人為的に口に入れて味を覚えさせる。

#### 2 哺乳時

- (1) 哺乳は、朝夕2回に分けて行う。1日当たりの哺乳量は4リットルが一般的であるが、生後3週目以降は要求量が高まるため、徐々に増やしてもよい。
- (2) スターターの採食量が、3日連続で1日当たり1kg以上になったら離乳させる。また、生後5週目の段階でスターターの食い込みが悪い場合は、ミルクを減らして採食を促す。  
水分補給は、スターターを十分に食べさせるために重要であるが、ミルクと水（ぬるま湯）の同時摂取は、消化吸収の妨げとなるため、ミルク給与後30分以上の間隔を空けてから水（ぬるま湯）を与える。
- (3) 哺乳期間は、下痢の発生を防ぐため、乾燥した敷料を十分に補充して腹が冷えないようにする。下痢の場合はミルクの給与量を減らすとともに、脱水症状を防ぐため電解質製剤をお湯で溶かし給与する。電解質製剤は、溶かすお湯の量が多すぎたり、少なすぎたりすると逆効果になるため、製品に記載された用法・用量を守る。

### 3 育成時

- (1) 離乳後は、月齢の近い子牛同士で群飼する。疾病の予防と良好な発育を促すため、清潔で換気の良い畜舎で飼育し、良質乾草を自由採食させる。
- (2) 濃厚飼料は、タンパク質含量の高い育成用配合飼料を給与する。下痢を防ぐため、給与量は徐々に増やす。1日当たりの給与量は、2～3 kgを目安とし、朝夕2回に分けて給与する。
- (3) 育成牛の繁殖供用の目安は、月齢よりも体重・体高（体重 350 kg・体高 125 cm以上）を重視する。初産分娩 24 か月齢以内の目標を達成させるため、12～14 か月齢で初回授精を実施出来るよう、十分に飼料を食い込ませる。

### 4 放牧時

- (1) 放牧開始前には外気や青草に慣らすため、パドック等を利用して放牧馴致を行う。また、夏期の放牧では、直射日光を避けるスペースと飲水場所を確保する。
- (2) 公共施設に育成牛を預託する場合は、伝染性呼吸器病の予防のため、預託開始の3週間前までにワクチンを接種する。

---

## 肉用牛

---

### ◇放牧に向けた飼育管理

#### 1 放牧馴致

放牧1か月前から徐々に運動場に出して外気や日光にあて、野外を歩き回ることにより馴れさせる。第1胃の微生物を放牧環境の餌（青草）に適応させるため2週間前から青刈りの草を徐々に給与する。

#### 2 病気の予防

舎飼期に疾病に罹患している場合は、早期に治療し、回復させてから放牧する。ワクチンは、繁殖雌牛には異常産予防のための「アカバネ病ワクチン」や、気腫疽等予防のための「牛嫌気性菌5種混合ワクチン」、子牛には呼吸器病予防のための「牛呼吸器病5種混合ワクチン」を適期に接種する。

#### 3 削蹄

舎飼期は運動量が少ないこともあり、蹄が比較的早く伸びることから、削蹄してから放牧する。

---

## 豚

---

### ◇ 衛生管理

国内で豚熱が発生していることから、「飼養衛生管理基準」に基づき、農場を再点検し、特に次のことを徹底する。

- 1 部外者や車両の農場への立入りは原則として禁止し、車両等の出入りが必要な場合には消毒を徹底する。
- 2 病原体を豚舎内に持ち込まないようにするため、豚舎出入口に踏込み消毒槽を設置し、消毒を徹底するとともに、豚舎ごとに専用の作業衣・作業靴等を着用する。

- 3 農場周囲の防護柵や豚舎への防鳥ネットを設置し、野生動物の侵入や接触の防止に努め、特に、その排せつ物等が飼料や飲水に混入しないようにする。
- 4 飼料として肉を含む食品循環資源を利用する場合は、適正に加熱する（90℃60分またはそれと同等以上）。
- 5 日常の観察を徹底し、異常豚の早期発見に努めるとともに、発見した場合は、速やかに家畜保健衛生所に連絡し指導を受ける。

---

## 鶏

---

### ◇ 衛生管理

渡り鳥が移動する5月までは、高病原性鳥インフルエンザ発生のリスクが高いことから、発生防止のために「飼養衛生管理基準」に基づき農場を再点検し、特に次のことを徹底する。

- 1 部外者や車両の農場への立入りは原則として禁止し、車両等の出入りが必要な場合には消毒を徹底する。
- 2 病原体を鶏舎内に持ち込まないようにするため、鶏舎出入口に踏込み消毒槽を設置し、消毒を徹底するとともに、鶏舎ごとに専用の作業衣・作業靴等を着用する。
- 3 鶏舎への野生動物の侵入や接触の防止に努め、特に、その排せつ物等が飼料や飲水に混入しないようにする。
- 4 日常の観察を徹底し、異常鶏の早期発見に努めるとともに、発見した場合は、速やかに家畜保健衛生所に連絡し指導を受ける。

---

## 草地・飼料作物

---

### ◇ 草地の適切な施肥管理

#### 1 採草地

- (1) 早春施肥は、多雪地域では消雪後速やかに、少雪地域では牧草の萌芽前に行う。
- (2) 施肥量及び施肥配分は、年間目標収量及び刈取回数に応じて表1及び表2のとおりとする。土壌中の交換性カリ含量が18 mg/100 gを超える場合はカリの施肥量を減らす。
- (3) 牛尿を追肥として施用する場合は、牛尿のEC（電気伝導度）を測定し、化学肥料代替量推定値（表3）により化学肥料を減らす。

表1 オーチャードグラス主体草地の目標収量別施肥基準

年間目標収量 (生草 t/10a)	年間成分施用量(kg/10 a)				刈取 回数	施肥配分 (早春：各刈取後)
	窒素	りん酸	加里	苦土		
5	15	10	10	10	3	5：3：2
6	20	15	15	10	3	5：3：2
					4	4：3：2：1
7	25	17	17	10	4	4：3：2：1

表2 チモシー主体草地の目標収量別施肥基準

年間目標収量 (生草 t/10a)	年間成分施用量(kg/10 a)				刈取 回数	施肥配分 (早春：各刈取後)
	窒素	りん酸	加里	苦土		
4~5	10	6.7	6.7	10	2	4：1または3：2
					3	5：3：2
6	16	10.7	10.7	10	3	5：3：2

表3 ECによる牛尿 1m<sup>3</sup>中の化学肥料代替量推定値

肥料 成分	EC (mS/cm、25°C補正值)										
	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50
窒素 (kg)	0.19	0.27	0.43	0.65	0.95	1.31	1.74	2.25	2.82	3.47	4.18
カリ (kg)	0.49	1.11	1.73	2.34	2.96	3.58	4.20	4.81	5.43	6.05	6.67

## 2 放牧草地

収量の季節平準化をねらいとした施肥を行う。施肥量は表4のとおりとする。

表4 放牧草地の目標収量別施肥基準 (標高400m以下、スプリングフラッシュ抑制草地)

年間目標収量 (生草 t/10a)	年間成分施用量(kg/10 a)				施肥時期及び施肥配分
	窒素	りん酸	加里	苦土	
4	10	6.7	2.5	10	・年2回施肥の場合、6月上～中旬に6割、8月上～中旬に4割 ・年3回施肥の場合、早春に2割、6月中～下旬に5割、8月上～中旬に3割
5	15	10	4	10	

### ◇ 牧草地におけるムギダニの早期発見と防除

#### 1 ムギダニの早期発見

ムギダニは、4月中旬頃から活動期を迎える。ムギダニの被害にあった牧草は、葉が次第に黄変し、多発した場合は枯死するので、早期発見と防除に努める。

#### 2 ムギダニの防除

ムギダニの発生が著しい場合は、スミチオン乳剤の1,000倍液を散布し防除する。なお、散布後2週間は採草、放牧を避ける。

### ◇ 飼料用とうもろこし畑の準備

#### 1 適品種の選定と種子の確保

サイレージ用とうもろこしは、本県の奨励品種(表5)の中から早晩性や作付体系を考慮し、栽培期間内で黄熟期に達するものを選択する。

子実用とうもろこしは、完熟期(子実水分25~30%)での収穫となるため、サイレージ用とうもろこしよりも栽培期間が2~3週間長くなることを考慮し、品種を選定する。

表5 サイレージ用とうもろこしの奨励品種

品種名 (系統名)	早晩性	適当な栽植密度
おおぞら (北交 55 号)	極早生	8,000 本/10a
パイオニア 100 日 (P9400)	早生	7,000 本/10a
パイオニア 106 日 (36B08)	早生	7,000 本/10a
スノーデント 110 (LG30500)	早生	7,000 本/10a
スノーデント 108 (LG3490)	早生	7,000 本/10a
パイオニア 108 日 (34N84)	早生	7,000 本/10a
北交 65 号	早生	7,000 本/10a
きみまる (北交 72 号)	早生	7,000 本/10a
パイオニア 110 日 (P0640)	早生	7,000 本/10a
パイオニア 115 日 (P1690)	中生	6,000 本/10a
パイオニア 118 日 (P2088)	中生	6,000 本/10a
クミアイデント 118N (GN1645)	晩生	6,000 本/10a
タカネフドウ (長交 C980)	晩生	6,000 本/10a

## 2 ほ場の準備

- (1) 完熟した堆肥を 4～8 t/10 a 施用し、プラウ等により土壌とよく混ぜる。
- (2) 砕土及び整地の良否は、播種精度、出芽揃い、除草剤の効果等に影響するので、丁寧に行う。

## 3 土壌改良資材の施用

- (1) 石灰質資材は、土壌診断に基づき pH6.0～6.5 の酸性矯正量を施用する。
- (2) リン酸質資材は、堆肥からのリン酸供給量が 10 kg/10 a 以上あれば施用しなくてもよい。